

TOEIC®スピーキングテスト/ ライティングテストで「実需の英語」を体感!

TOEIC®スピーキングテスト/ライティングテスト(略称:TOEIC SWテスト)は、ビジネスパーソンや大学生にどのような効果をもたらすテストなのか。英語トレーニング法指導の第一人者で、数多くの企業・学校で指導や講演を行っている千田潤一さんは、実際にTOEIC SWテストを受験し、こう分析します。

■ 発信する英語力が求められる時代に ■ マッチしたTOEIC SWテスト

従来のTOEICテストとは別に、スピーキング力とライティング力を測定・評価するTOEIC SWテストが実施されるに至った背景には、職場や日常生活で英語を使う場面がますます拡大しているのに伴い、スピーキングとライティングという能動的な能力を直接的に測定・評価する必要性が高まった、という認識があります。

私はこの新しいTOEIC SWテストを実際に受験し、こうした現状認識が出題形式、問題内容に的確に反映されたテストであり、グローバル化が不可避な日本の企業にとって、また、将来の企業活動を背負っていく大学生などにとって、英語のアウトプット力の目標地点を示す、極めて革新的なテストであることを体感しました。

■ 真のグローバル化は、 ■ 発信型の英語力を求める

「グローバル化」というと、以前、ある大手自動車メーカーの方からこんな話を伺ったことを思い出します。「私どもはみなさまからグローバル企業だと思われていますが、私たち自身はそうは思っていません。経済活動がグローバルなだけで、コミュニケーションは非常にドメスティックです。拙い英語力で、技術の力・商品の力に助けられながら商売をしているのが実情です」。

“英語はうまく話せないが商品を見てほしい!” これで勝負ができた時代を仮に「受信型英語の時代」としましょう。

PROFILE

千田 潤一 (ちだ・じゅんいち)

タイム・ライフ、AIU保険会社を経て、現在、英語教育コンサルティング会社である株式会社アイ・シー・シー代表取締役。英語トレーニング法指導の第一人者。英語学習に関する企業、学校での講演多数。講演回数は3500回以上、受講者数は10万人を超える。2003年度より、文部科学省の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を受けた、都道府県・市教育委員会による英語教員研修講師も務める。

【講演】経済同友会・トヨタ・本田技研工業・NEC・デンソー・富士通・日立・東芝・ソニー・三菱電機・三井化学・住友電工・全日空・NTT・花王・日本精工・各地の商工会議所など。



外国の人々が日本の製品でなければ、と考えてくれていた時代です。

ところが今、中国や韓国などの技術力・商品力は間違いなく日本に肉迫しています。モノのレベルが同等になり、日本が売り込みをかける側に回ったとき、受信力だけでなく、受信力をベースとした英語の発信力が勝負になるのは必然です。真にグローバル化した時代とは「発信型英語の時代」であり、すでにその時代に入っていることは、ビジネスに関わる方々の多くが肌で感じています。

そんな時代に、英語のアウトプット能力を測定・評価するテストが実施されるようになったのは、まさにベスト・タイミング。TOEIC SWテストは真のグローバル化が進展する時代に適合したテストだと私は考えています。

■ 社会で求められる英語力に ■ 直結したテスト内容

次頁の表のように、TOEIC SWテストではスピーキング

で6種類、ライティングで3種類の問題が出題されます。どの問題も、国際的な職場環境でのコミュニケーション力を的確に試すことができる問題ですが、特筆すべき点をいくつかご紹介いたします。

TOEIC®スピーキングテスト/ライティングテストの問題内容

TOEICスピーキングテスト (約20分、11問)	TOEICライティングテスト (約60分、8問)
音読問題	写真描写問題
写真描写問題	Eメール作成問題
応答問題	意見を記述する問題
提示された情報に基づく応答問題	
解決策を提案する問題	
意見を述べる問題	

■ 企業が必要とする英語力に合致する
「Eメール作成問題」

私が行った、日本の大手グローバル企業8社296名を対象とする英語研修調査の中に、「企業では現在、どんな英語力が必要とされていますか」という質問項目があります。この項目に対する回答で圧倒的に多かったのが「Eメールに関する英語」でした。

グローバルな企業では、英語でEメールの読み・書きをスピーディーにこなす力が求められているということがわかりますが、この力を試す問題がまさに、TOEICライティングテストに用意された「Eメール作成問題」です。この問題は「出口の英語」、つまり、実社会が求める即戦力としての英語力を試すテストであり、ビジネスパーソンに非常にマッチした出題内容だと言えます。

■ 英語で考えをまとめ、
アウトプットする問題

スピーキングのパートにある「提示された情報に基づく応答問題」「解決策を提案する問題」「意見を述べる問題」は、問題の名称からも想像できるとおり、単なる英語力テストに留まらず、思考力も試される、まさに実践的な問題です。

これらの問題に共通しているのは、提示された問題を読んで理解したのちに、「英語で考え、その結果を英語でアウトプット」しなければならないことです。つまり、ビジネスの現場に必要な英語によるコミュニケーション能力が試さ

れることになります。ビジネスの能力のうちで基礎となるのはコミュニケーション能力ですから、これらの問題もまさに、ビジネスパーソンにとって大変役立つ問題だと言えるでしょう。

■ スピードを試される
即答即応形式の問題

ビジネスのキーワードはスピードです。世界中から送られてくるEメールを、従来のように訳しながら読んで対応しているとどうなるでしょう。訳して「わかった」と思ったとき、英語を英語で読み取った人は即座に反応して行動を開始していますから、競争になりません。即応能力はグローバルなビジネス社会で最も求められている能力の1つです。文字を介したEメールだけでなく、会話でも即応即答が必要なことは言うまでもありません。

TOEIC SWテストの有用性の1つは、英語での即答即応力をも試すことができる点にあります。スピーキングのパートにある「写真描写問題」は、写真を見て30秒間で回答を準備し、次の45秒間に英語で写真の内容を説明しますが、45秒を過ぎると解答を録音することができない仕組みになっています。同じくスピーキングのパートにある「応答問題」では答えを準備する時間すら与えられておらず、1つの質問に対し15秒あるいは30秒という短い時間の中ですぐに答えを言わなければなりません。

こうした即答即応の問題形式が、英語運用能力にスピードも求められる時代に非常にマッチしたテストであることは明らかです。

■ スピーキングの基礎力も
試せる「音読問題」

スピーキングテストの冒頭に「音読問題」が用意されています。音読力は、その言語を運用できる力＝言語力そのものです。

英文を読むとき、意味のまとまりを無視し、単に単語を読んでいるだけでは言語力があるとは言えません。文を見て瞬時的に意味を把握し、聞き手が理解しやすいようにアウトプットできる力。これが言語力であり、この力はスピーキ

ング力の基礎となります。基礎力を測定するために音読問題を取り入れていることは、音読の重要性を説き続けてきた私にとって大変共感を覚えることでした。

■ 活用がもたらす課題解決への糸口

■ 社員にはっきりとした目標を示し、モチベーションをあげるTOEIC SWテスト

最近、企業の人事担当者や英語研修担当者はこんな課題を抱えているようです。

- ①社員の英語能力評価をもっと詳しく行い、よりの確な人材配置ができれば…
- ②TOEICテスト(リスニング、リーディング)でハイスコアを出せる人たちの実力をさらに伸ばせたら…
- ③グローバル企業を目指すという意識をもっと徹底できたら…
- ④昇進・昇格基準となっているTOEICテストのスコアをクリアした後も勉強を続けてくれたら…

今までお話してきたTOEIC SWテストの有用性を考えると、このテストが企業におけるこれらの課題を解決するカギになることも期待できそうです。

TOEICテストで総合的な英語力を確認し、さらに、発信力を詳しく見極めたいというケースでは、TOEIC SWテストの結果を見れば、実際にどのくらい話せるのか、あるいは書けるのかが明確にわかり、海外派遣要員を選抜する際、即戦力となる人材を選ぶのに役立つでしょう。

③の課題に関しては、TOEIC SWテストを活用し、グローバル企業として必要とされる英語の発信力を明確に打ち出すことで、英語の必要性を今まで以上に認識させることができるのではないかと思います。

■ TOEIC[®]テストとTOEIC SWテストを併用する意義

「TOEIC SWテストがそれほど有用なら、従来のTOEICテストは不要では」と感じる方がいらっしゃるかもしれませ

ん。この2つのテストの関係は次のようにお考えいただくと納得できると思います。結論を先に申し上げますと、「発信力の基本は受信力」ですから、両方のテストを併用して英語力を伸ばしていくことが最善の方法になるのです。

図1. ListeningとSpeakingの関係



図2. ReadingとWritingの関係



上の図1は、リスニングの大きな円の中にスピーキングが入っています。この図は「人は、聞き取れる英語しか話すことができない」ことを示しています。つまり、話す力をつけるためにはまず、聞く力をつけなくてはなりません。

図2も同様に「人は、読める英語しか書くことはできない」ということで、書く力をつけるためには読む力をつけなければなりません。図1、2の黒い大きな部分が基礎力=受信力で、この力を試すのがTOEICテストです。

英語の4技能のこうした関係を考慮すると、TOEICテストとTOEIC SWテストの様々な活用方法が浮かび上がってきます。

- ①幅広く社員の潜在的な英語のコミュニケーション能力を測定し、基礎力を固めるうえでの目標として、TOEICテストを利用する。
- ②海外派遣の緊急性の高い部署では、TOEIC SWテストの結果も見つて派遣要員を選抜する。
- ③緊急性の低い部署でも、TOEICテストのスコアが一定のレベルに達した社員にはTOEIC SWテストを受験させる。
- ④TOEICテストのスコアが一定のレベルに達していない社員にも定期的にTOEIC SWテストを受験させ、英語力の最終目標地点の具体的なイメージを「体感」させ、モチベーションを向上させる。

■ 英語発信のニーズは、
今はなくてもすぐにやってくる

現在のところインプットの英語だけで十分な部署、あるいは企業もあるかと思えます。しかし、ある日突然、外国人社長がやってくる時代です。2007年5月にはいわゆる「三角合併」が解禁となり、M&Aは加速度的に進んでいくでしょう。そうなったとき、社内の共通語はまず英語になります。そこで初めて「これからはアウトプット力だ!」では遅すぎます。

現代とはこんな時代です。今英語は必要ないといって取り組まなかった人が、気づいたときにはもう遅いのです。だから今からスタートすべきなのですが、まずは現在持っている発信能力を確認するために、また今後の到達目標を提示するためにも、TOEIC SWテストは大変役に立つと思います。

■ 「英語学習の最終目標」を
■ 明確に示したTOEIC SWテスト

ビジネスパーソンに限らず、多くの日本人英語学習者が、最終的にどんな英語力が必要なのか、その到達点のイメージをつかめないうまま勉強してきたことは否めません。企業でも、英語力をつけなければという総論はわかっているが、社員にどんな英語力をつければよいのか、具体的な答えをもっているケースは案外少ないようです。

そんな中、英語学習の最終目標 = 英語の発信力のレベルを明確に示したと言えるTOEIC SWテストは、日本の英語学習の根本を変えるほどのパワーを秘めている、と私は感じています。このテストを受験することで、「この英語が最終目標だったのか。では、それをクリアするために何をやればいいのか」という姿勢を、英語学習者が持つようになるでしょう。

到達目標が明確なこのテストを受験することで、出口の英語、別の表現をすると、実社会で実際に必要とされる「実需の英語」を社員が体感すれば、企業全体の英語学習へのモチベーションがさらにアップし、能力向上につながる事が期待できます。



■ TOEIC SWテストは、些細なミス
減点するテストではない

このテストでもう1つ、重要な点を補足します。このテストは文法の細かな間違いやスペリング・発音のミスが減点対象にしません。例えば、threeのthをうまく発音できず「トゥリー」と発音しても、円滑なコミュニケーションの妨げにならないかぎり、減点されません。そうした瑣末なことではなく、与えられたタスクに対して的確な内容で解答できているかどうかを採点ポイントにしています。

その理由は、このテストは、グローバルな環境でいかにコミュニケーションをとれるかを測ることに主眼を置いたテストであり、英語を母国語とする人たちのように話せたり書けたりする力を測るものではないからです。言葉を変えて言えば、英語を第2外国語として使う私たちの「実需」に基づいた、実需の英語力を測るテストであるということです。

■ 大学生の英語力到達目標は今や、
■ 仕事で使える英語力

ビジネスパーソンがTOEIC SWテストを受験するメリットを述べてきましたが、このテストはビジネスパーソンにのみ有効なテストだという意味ではありません。例えば、これから社会に出ていく学生、とくに大学生にとっても、非常に有効なテストと言えるでしょう。

文部科学省は、平成15年3月に策定した「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の中で、大学生の

英語の到達目標を「仕事で英語が使える」こととしています。仕事で使える英語力とは、受信能力だけではなく、発信能力も含んだトータルな英語力です。ですから、社会で必要とされる英語力を体感し、その力を明確にイメージできるようになるためにも、ぜひ大学生に受けてもらいたいと願っています。大学生がTOEIC SWテストを活用して勉強すれば、国が求める英語力、企業が求める英語力をいつも目標にして英語を学んでいくことができます。

1990年初頭の段階では、TOEICテストを導入している大学は非常に少なかったようですが、現在では全国で400校を超えているそうです。企業と同様に大学でも、TOEICテストと並行してTOEIC SWテストを導入すれば、

- ①学生のアウトプット能力向上に、より強力な動機付けとなる
- ②アウトプット能力は、インプット能力向上を前提とするものだという気づきにつながる

- ③結果として、社会の実需に結びついたトータルな英語力を目標にできるなどの効果をもたらすでしょう。

企業だけでなく、大学、高校、専門学校でも、キーワードは「実需の英語」です。実需の英語の具体的な到達点を示すTOEICスピーキングテスト/ライティングテストが広く利用され、真のグローバル化社会において、日本人がパワフルな発信の英語で勝ち抜いていくことを、私は心から願っています。

(参考データ)

TOEIC SWテストの受験者の内訳は、2007年1月～4月の公開テスト受験者のうち、約30%が学生でした。

(財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 広報渉外部)